


The legend of OBASAN



ここにいます
「がん電話情報センター」
あなたの知るを助けます

ancer

(全国一律の電話料金でご利用いただけます。
PHS、一部のIP電話からはご利用いただけません。)

おーここにじょうほう
0570-055224
受付時間：平日 12:00~17:00
(土日・祝祭日・年末年始・夏期休業を除く)

「がん」と聞くと一般的にどう感じるのだろうか。治らない、苦しんで死ぬ、痛みが強い、などを思い浮かべるのが普通か。何よりも「あつごう間に」進行して、思いがけずに若くして亡くなる、イメージが強そうだ。

実際は、そんなことはない。多くのがんが治るようになり、完治しなくても相当の期間を「がんと共に生きる」。もちろん治療と仕事や日常生活を工夫しつつであっても、ともかく、がんを診断されたら淡雪のようにはかなく世を去る、とごうごうとほく。

だからがんを診断された知人が、ある期間は入院治療や通院治療に時間を取られて仕事や趣味をお休みしても、またいつの間にか戻ってきた、とごうごうとほくめずじりはないはず。

したがって、ご自分がんかもしれないという状況になっても、



NPO法人血液情報広場・つばさ理事長、
がん電話情報センターCTIS相談主任、
日本骨髄バンク(骨髄移植推進財団)常任理事

橋本 明子

「伝説のおばさん」のオススメ 16

がんと共に生きる

～人生の重みをポケットに入れて～



Akiko Hashimoto

悲観しなくてよいはずだ。それでも診断当初は衝撃を受けるだろうし(それは他の病気だって同じはず)、そのがん種を理解するのに時間がかかると思う。しかし慎重に検査が繰り返されて、最適な治療法が選ばれた後、投薬や手術の予定が立てられる。

つまり、がん＝早期の死、ではないこと。つまり、「軽くない病」を伴いつつもある時間が与えられたということだ。がんによつては「天光悦寿を全うするまでがんと共に生きる」。

「それは、何を意味するのだろうか。答えは様々かもしれないが、少なくとも、命の重みと人生の有限について常にポケットに入れて生きることになる。それは家族の罹患であっても同じかと思う。

三人に一人が生涯の内にかんを患うというこの時代。仮にかんになっても、ならなくても、たいせつな家族や友人と過ごす機会を大事にしたい。ていねいに作られた料理と美しい音楽を選びたいものだ。少なくとも、限りある人生の一日にふさわしい会話をしたい。